

縄文人からのバトン

日立第一高等学校附属中学校

一年一組

なかむら中村

まさあね誠宗

先日、私は国立科学博物館に行きました。その時、日本館の「日本人と自然」のコーナーに興味深い展示を目にしました。

それは「縄文時代の手厚い介護」というものでです。この展示には、一人分の骨が置いてありました。そして、この骨の特徴として、この人の脚の骨は、異常に細いのです。この

人は、十代後半の女性と考えられており、脚の骨が細いのは、幼少時に小児麻痺になったまま、一生を寝たきりで過ごしたものだからだと考えられているそうです。そして、この年齢まで生きることができたのは、縄文時代においても、仲間の手厚い介護があった証拠と考えられると記されています。

私はこの展示を見て、とても驚き、そして感心しました。何千年も前の昔から、障害のある人や、怪我のある人を助け、支えあう文

化が日本にあったのだ、と思つたからです。

縄文時代は、まだ稲作が大陸から伝えられていないことから、狩りや採集をして食料を得

ていたため、安定した食事を取れていなかった

たと推測されます。このような環境下でも、

仲間を見捨てない「心」が美しいと感じまし

た。

そして、このように助けあう気持ちは、縄

文時代だけではなく、今の時代においても、

大切だと思えます。

4 3

縄文人が、仲間を介護したように、私達も、

家族や友達が怪我や病気になつたり、悩み事

があつた時は、看病をしたり、話をしてみた

りするとよいと思えます。私も、風邪を引い

た時に、家族に看病をしてもらい、安心して

生活出来た事があります。

もし今の時代に、この四肢が不自由な縄文

人と、この人を介護している人達がいたら、

この四肢が不自由な人はもっと長生きしてい

たと思えます。なぜなら今は、科学や、医学

が発達してゐるからです。しかし、もし今の
 時代でも介護していた仲間がおらずに、四肢
 が不自由な人だけしか居なかつたら、この
 人は、生きていけないと思います。なぜなら、
 車いすを押す人も、食事を食べさせてくれる
 人もいないからです。つまり、科学によつて、
 人は長生き出来るようになったけれど、本当
 に大切なのは、人の温もりだと私は思います。
 だから、私は思いやりの気持ちを持って生
 活していきたいです。そして、家族や友達と、

支えあつていきたいと思います。
 これから、私たちは縄文人から続いてゐる
 「助け合いのバトン」を引き継いでゆくいメ
 ージで生活するとよいのではないでしょう
 か。そして、自分が支えるだけでなく、支え
 てもらふ時に感謝する事も、とても大切な事
 だと思います。
 最後に、支えあふ事について考えるきつ
 けとなつたすばらしい展示がある国立科学博
 物館に感謝の気持ちと、体の不自由な仲間を

介護する縄文人達に尊敬の気持ちを送ります。